



亀中だより

No. 19 令和8年9月9日 文責 岡田

For The Students!

2026年度 平和への誓い 広島平和記念式典より…

3年生にとっては中学校生活の中でも大きな行事である修学旅行が今月末に迫ってきました。事前学習として取り組んできた平和学習の集大成ともいえる修学旅行です。楽しさいっぱいの修学旅行であると同時に、今、そしてこれから生きていくものとして平和への思いを大切にしたい修学旅行であってほしいと思います。

8月6日、被爆から81年となる原爆の日を迎え、広島市の平和記念公園では「平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）」が行われました。

式典では、広島市立高須小学校6年の柿崎由宇さんと同市立高南小学校6年の河野和希さんが「平和への誓い」を読み上げました。「平和とは、誰かからあたえられるものでなく、世界中の人々で創り上げるもの」という締めくくりの言葉に私たちもその一員であることを忘れるわけにはいきません。世界平和のために何ができるかと考えると、無力かのように思ってしまうかもしれません。しかし決してそうではないのです。二人の小学生が教えてくれたように、「相手の気持ちを想像し、意見の違いがあっても認め、受け止めること」といった日常の小さな行動が平和への後押しとなります。世界平和のために、まずは家族、身近な友だちのために行動できる。そんな亀中生であってほしいものです。



平和への誓い

もしも「大切なもの」が一瞬で消えてしまったら、どんな気持ちになるのでしょうか。私たちが笑い合っているときにも、尊い命が失われている現状があります。今もどこかで、当たり前前の日常がうばわれています。

ぼろぼろになった制服。黒く焦げたお弁当箱。それは、当たり前前の毎日を生きていた証です。昭和20年（1945年）8月6日、午前8時15分。たった一発の原子爆弾が、人々の暮らしを人生を地獄に変えました。髪は焼けちぢれ、全身の火ぶくれが破れ、火傷した皮膚が垂れ下がった人々。「痛いよ。苦しいよ。」「助けて、お母さん。」「死にたくない。」「助けてあげられなくてごめん。」「死んでしまうつらさ、生き続ける苦しみは、想像することさえ恐ろしいことです。

私たちには、被爆体験を直接聴くことができる最後の世代として、当時の記憶を事実として受け止める使命があります。目をそらさず、知ろうとすること。悲しい現実でも向き合うこと。そこには、「生きたかった人々」、「生き続けた人々」の思いがあります。

私たちには、広島の子供として、行動する責任があります。相手の気持ちを想像し、意見の違いがあっても認め、受け止めること。平和への思いを、自分なりの方法で表現すること。一人一人の小さな行動が、平和への後押しとなります。

平和とは、誰かからあたえられるものでなく、世界中の人々で創り上げるものです。こどもである私たちも、その一員として平和への一歩を踏み出します。かけがえのない「大切なもの」を、確かな希望を、未来へ届けるために。